



弓岡隼人の事件簿 ポイズンフェイク

ナゼカイチロウ

朝永博士の謎の死

弓岡隼人の探偵事務所は、ペットショップの二階にある。犬や猫の鳴き声の中から、階段の足音を拾い取り、新しい事件の訪問者を予測することが隼人の趣味の一つだった。

「若い女の足音だ。かなり苛立っている」

事務所のドアが開くと同時に女が叫んだ。

「先生、修司は、無実なんです」

「まあ、まあ、お気を沈めてください」

隼人の予想通り、二十代後半の美しい女性が現れた。長い黒髪でロングスカートのお嬢様風のたたずまいの女性だった。

「私の名前は、朝永葵。朝永俊太郎の娘です」

「なんと、今年にノーベル生理学賞を受賞した朝永博士の娘さんでしたか」

葵の指示でテレビをつけると、ニュースで大々的に朝永俊太郎の死が取り上げられていた。

「今日の朝、研究室で父が毒を盛られて、死んでいる姿が発見されたのです。父の研究室に所属している今中修司准教授が、容疑者として連れて行かれました。昨日の晩に父と議論していたからのようです。でも、私は、心優しい修司がそんなことをするなんて、信じられないのです」

葵の大きな眼は、潤んでおり、今中との関係を容易に想像できた。

「涙を拭いてください。今中さんの無実を調べてみますよ」

蛇の毒

隼人は、事件がおきた帝都医科大学に向かった。現場には、春日部刑事がいた。隼人とよく事件で出くわす顔見知りの刑事だ。隼人は、もともと工学部の出身であり、科学の知識を事件の解明の手がかりにする探偵である。考えるより行動が先になる春日部刑事とは、犬猿の仲であった。

「弓岡か。今回は、君の出番は無さそうだな」

「ほう。」

「朝永教授に研究テーマを知っているかい。」

インドネシアの蛇の毒を使い、血液濃度を薄め、脳卒中を防止する薬物の研究だ。朝永教授は、この蛇の毒をコーヒーの中に盛られて殺害されていたのだ。蛇の毒は、五、六時間で効果が現れる。死亡推定時刻は、明け方の二時。逆算すると八時から九時の間に博士は、毒を盛られたことになる。そして、この時間に朝永博士といっしょにいた人物が、今中准教授なのだ。今中は、博士と研究で対決することが多かったそうだ。研究室に通うこともまばらになっており、昨日の訪問も一週間ぶりだったそうだ」

大学構内を春日部刑事と隼人が歩いていると、小柄な男が会釈した。

「あの男は」

「第一発見者の研究室事務員の藤原満夫です。勤勉な男のようで、毎朝最初に研究室に入ります。そして、今朝、博士の異常を発見したわけです」

春日部刑事が、隼人と会話しているところに部下の刑事から報告があった。

「今中准教授の分室から、事件に使われたと思われる蛇の毒が発見されました。冷蔵庫の中でプラスチックの容器に入れられて保存されていたようです。」

「弓岡が関わっても、残念ながら犯人はもう確定だな」

春日部が、勝ち誇ったような安堵の表情を浮かべた。

二人は、事件が発生した現場である研究室に到着した。入口傍に来客用のテーブルとソファがあった。テーブルの上には、コーヒーカップが、事件の発見当時のまま置かれていた。研究室の奥に博士の机があり、論文の束が乱雑に重なっていた。机の棚には、博士の歯ブラシがマグカップに入れられていた。歯ブラシの先端が赤みがががっていた。

「これは」

「そういえば、博士は、二日前に虫歯の治療のために歯医者予約をしていたようだ。」

春日部刑事が、思い出したように語った。

「やはり犯人は、今中准教授では、ありませんよ」

「何だって」

隼人が、事件の解決を確信した鋭い目つきで振り向いた。

意外な犯人

「藤原さんをお呼びできてくれないか。」

藤原が、事件現場に呼び出された。

「今中准教授が、犯人らしいじゃないですか。非常に残念ですよ。将来有望な人だったのに」

藤原が冷静に話し出した。

「藤原さん、蛇の毒は、口の中に傷がないと効き目がないことを知っていましたか。」

隼人が、藤原を問いただした。

「ええっ」

春日部刑事が、驚嘆の声を上げたときに、藤原も驚きを隠せなかった。

「蛇の毒は、微量でも人を死に至らしめるほどの猛毒ですが、普通に食べたり、飲んだりしても問題ないんです。蛇の毒は、たんぱく質として、消化され、むしろ強壯剤の効果があるほどです。ただし、口の中に傷があり、血液と混ざってしまった場合は別です。およそ五時間で貴重な生命を奪ってしまうのです」

隼人が、蛇の毒について語ったときに、藤原が自分の失敗を悟っていた。

「虫歯も同じことがいえます。藤原さんは、この蛇の毒の性質について、ご存知なかったようですね。そうすると、答えは一つです。

博士は、自殺だったのですよ」

「何だって」

春日部刑事の驚きの声の影にうなだれている藤原の姿があった。隼人が語りだした。

「蛇の毒が口の中に傷があって、効き目があることを知っている人物。今中さんは、一週間研究室に出入りしていなかったため、博士が虫歯を患っていること知りません。つまり、博士自身だったのです。

この事件をややこしくしたのが、ここにいる藤原さんです。藤原さんは、おそらく今中さんに博士殺しの罪をきせたかったようです。しかし、蛇の毒の効き目についての知識はなかったのです」

「私は、博士のかたきを取りたかったのだ」

藤原が、事件の顛末を話し始めた。今中氏が、朝永博士の研究を否定する内容を発表しようとしていたこと、そのため事件前日の夜に博士との激論する現場を盗み聞きしていたこと、その次の朝にぐったりしている博士を発見し、怒りを覚えたことを語った。そして、今中氏に罪をきせるために蛇の毒の容器を今中研究室の冷蔵庫に移し、博士の遺書を隠したことを告げた。

「博士がかわいそうじゃないか」

藤原が、がっくり膝をついた。

事件の顛末

最後に春日部刑事が、隼人に質問した。

「蛇の毒は、傷口がないと効き目がないという知識はどこで手に入れたんだね」

春日部刑事の質問に対して、隼人が少し微笑んだ。

「ああ、本当に偶然だが、自分の事務所の一階がペットショップでね。そこの店主が詳しくだったのさ」

隼人は、釈放された今中と葵に対して事件の報告を行っていた。

「先生がこんなことになってしまうなんて。結局、俺の責任なんだ。自分の研究で先生を傷つけてしまった」

今中が、罪の意識を感じているときに、隼人が、博士の遺書を手渡した。

「今中君、非常に悔しいが、君の研究が正しかったようだ。私は、自分の名声を捨てられず、自ら命を絶つ。自分の研究テーマの蛇の毒で最後を迎えるなんて一興じゃないか。しかし、蛇の毒を使い、全世界の人のために脳卒中を防止する研究は続けてほしい。また、葵の面倒も頼む。

朝永俊太郎」

「わかりました。教授。」

今中と葵は、幾分救われた表情でうなづいた。